

『源氏物語』源典侍考

——「紅葉賀」巻の登場から——

杉浦一彰

一、問題の所在

近年における源典侍研究の目的は、「挿話^①」的な登場という捉え方や「色情狂的な老女^②」という人物理解を改めることだった。そのため源典侍研究は、主に、登場場面の多い「紅葉賀」巻を対象として、彼女の言動や物語展開との関わりについて検討されてきた。たとえば、三谷邦明は、源典侍が桐壺帝の愛人である点や殿舎が主要な舞台となる点などから、「藤壺事件に類似する王権への〈禁忌性〉」が含まれるとし、従来の挿話的理解から物語の、「中核的な主題とも響鳴」する可能性を示された^③。また、源典侍の人物造型に関する研究では彼女の〈巫女性〉が多く指摘されてきている。いくつか例をあげると、古代伝承との関わりを見る小林茂美^④や、内侍所御神楽との関わりを指摘する鈴木日出男^⑤、和歌表現に注目する小嶋菜温子^⑥、久富木原玲らの研究がある^⑦。また、藤本勝義^⑧や倉田実^⑨のように、典侍という職掌から物語内の役割を検討するものもある。

しかし、源典侍が年齢にそぐわない言動をとるため、今でも人物像の基本を、「烏澁^⑩」性に求める認識は動かしがたい。確かに彼女の人物造型には、『伊勢物語』六三段に登場する所謂〈つくも髪^⑪の女〉からの影響が看取されるので、〈烏澁な

老女」という理解は自然にもたらされる。しかし、「紅葉賀」巻の三分の一にも相当する分量を割いてまで源典侍を登場させたからにはそれなりの意味があるだろう。また、人物造型にも、「作者のオリジナルの人物設定」¹¹もされているはずである。そうした源典侍の魅力が前記した数々の研究を生んでいることも事実である。

本論は、研究成果を踏まえつつ、「烏澁な老女」という〈読み〉が大半でなされている現状を改めることに目的がある。作品本文の一字一句の〈読み〉から浮き彫りになる新たな源典侍像を提示したい。

二、「よしある宮仕人」としての一面

まずは源典侍の人物像が語られる箇所を次に示す。

年いたう老いたる典侍、人もやむごとなく心ばせありて、あてにおほえ高くはありながら、いみじうあだめいたる心ざまにて、そなたには重からぬあるを、かうさだ過ぐるまで、などさしも乱るらむといぶかしくおほえたまひければ、戯れ言いひふれてころみたまふに、似げなくも思はざりける。あさましと思しなから、さすがにかがるもをかしうて、ものなどのたまひてけれど、人の漏り聞かむも古めかしきほどなれば、つれなくもてなしたまへるを、女はいとつらしと思へり。

(紅葉賀・①・三三六頁 傍線は引用者。以下同)

三谷邦明は、この「紹介文で彼女の輪郭がほぼ理解できる」とし、その特徴を、「正性」と「負性」に分ける。¹²「負性」とは、傍線で示した箇所、つまり老女で、「ありながら」、好色な性格である点である。当時の年齢に対する認識は、『梁塵秘抄』の「三十四五にしなりぬれば 紅葉の下葉に異ならず」(二九二頁)¹³に窺える。『二中歴』には、「不用物」として、「老

女の好色」が挙げられる。¹⁴『枕草子』四三段「にげなきもの」には、「老いたる女の、腹高くてありく。若き男持ちたるだに見苦しきに、こと人のもとへ行きたるとて腹立つよ」(二〇二頁)¹⁵とあり、好色な老女に対する蔑視が確認される。

右引用文においても波線を付した光源氏の心中思惟には「あさまし」とある。光源氏もまた源典侍の好色な一面に眉をひそめるのであるが、その一方で、「をかし」とも思っている。また、三谷が、「負性に眼をとられて、逆な面も忘却してはならない」と述べるように、この部分では「正性」も語られていた。加えて、右引用文直前には次のような場面がある。

帝の御年ねびさせたまひぬれど、かうやうの方え過ぐさせたまはず、采女、女藏人などを、かたち心あるをば、こともてはやし思しめしたれば、よしある宮仕人多かるころなり。はかなきことをも言ひふれたまふには、もてはなるることもありがたきに、目馴るるにやあらむ、げにぞあやしうすいたまはざめると、こころみに戯れ言を聞こえかかりなどするをりあれど、情なからぬほどにうち答へて、まことには乱れたまはぬを、まめやかにさうざうしと思ひきこゆる人もあり。

(紅葉賀・①・三三五～三三六頁)

「桐壺」巻において、桐壺更衣を偏愛していた桐壺帝は、「かうやうの方」も見過ぐさない性格でもあった。「かうやうの方」とは一般的な女性関係を指し、帝の「色好み性」や王者としての資格¹⁶が示される。傍線部以降では、桐壺帝の価値観に沿う女性が集められていたこと、光源氏の「情けなからぬほど」の対応を非難する雰囲気があったことが確認される。つまり、源典侍は、こうした「宮廷全体の雰囲気」に支えられて、存在¹⁷していたわけである。源典侍の言動を捉える上で、「宮廷全体の雰囲気」は念頭に置く必要がある。

では、源典侍と光源氏との交流が初めて語られる場面を読み直してみよう。

上の御梳櫛にさぶらひけるを、はてにければ、上は御桂の人召して出でさせたまひぬるほどに、また人もなくて、この内侍常よりもきよげに、様体頭つきなまめきて、装束ありさまいとほなやかに好ましげに見ゆるを、さも古りがたうもと心づきなく見たまふものから、いかが思ふらんとさすがに過ぐしがたくて、裳の裾を引きおどろかしたまへれば、かはほりのえならずゑがきたるをさし隠して見かへりたるまみ、いたう見延べたれど、目皮らいたく黒み落ち入りて、いみじうはつれそそけたり。似つかはしからぬ扇のさまかなと見たまひて、わが持たまへるにさしかへて見たまへば、赤き紙の映るばかり色深きに、木高き森のかたを塗りかへしたり。片つ方に、手はいとさだ過ぎたれど、よしなからず「森の下草古いぬれば」など書きすさびたるを、言しもあれうたての心ばへや、と笑まれながら、「森こそ夏の、と見ゆめる」とて、何くれとのたまふも、似げなく、人や見つけんと苦しきを、女はさも思ひたらず。

(紅葉賀・①・三三六―三三七頁)

源典侍を垣間見した光源氏は、彼女の年齢不相応な容姿に不快感を覚えるが、一方で、「いかが思ふらん」と無視もできなくなる。光源氏が源典侍の裾を引くと、とても彼女には「似つかはしからぬ扇」で顔を隠す。その扇は、「老いと好色をさながら映し出」した¹⁸。真つ赤な扇面には金泥で森の絵が描かれ、「おほあらしのもりのした草おいぬれば駒もすさめずか人もなし」(古今集・雑歌上・八九二・よみ人しらす¹⁹)の一節も記されていたからである。その一節から、「男ひでりを嘆く気持ち²⁰」を即座に読み解いた光源氏は、「言しもあれうたての心ばへや」と思う。そして、彼女を揶揄する気持ちで、「ほととぎす来鳴くを聞けば大荒木の森こそ夏の宿りなるらめ」(信明集)の一節を交えた声かけをするのであった。

しかし、光源氏の侵入が源典侍の予期しなかった事態である点、桐壺帝の整髪に従事するために、彼女が「常よりもきよげに」準備したとある点を見過ぐしてはならない。光源氏には否定的に受け取られた扇であったが、桐壺帝に同じ感想を持たせるとは限らないのである。それを証するように、光源氏と源典侍のやり取りを眺める桐壺帝の存在が明かされる。

君し来ば手なれの駒に刈り飼はむさかり過ぎたる下葉なりとも

と言ふさま、こよなく色めきたり。

「笹分けば人や咎めむいつとなく駒なつくめる森の木がくれ

わづらはしさに」とて立ちたまふをひかへて、「まだかかものをこそ思ひはべらね。今さらなる身の恥になむ」とて、泣くさまいといみじ。「いま聞こえむ。思ひながらぞや」とて、ひき放ちて出でたまふを、せめておよびて「橋柱」と恨みかくるを、上は御徒はてて、御障子よりのぞかせたまひけり。似つかはしからぬあはひかなと、いとをかしう思されて、「すき心なしと、常にもて悩むるを、さはいへど、過ぐさざりけるは」とて笑はせたまへば、内侍は、なまはゆけれど、憎からぬ人ゆゑは濡れ衣をだに着まほしがるとぐひもあなればにや、いたうもあらがひきこえさせず。

(紅葉賀・①・三三八頁)

引用したのは、前の引用文に接続する箇所である。二人のやりとりを垣間見した桐壺帝は源典侍に言葉をかける。その発言には、全く二人の「似つかはしからぬあはひ」を非難する雰囲気を感じられず、むしろ、「過ぐさざりけるは」と源典侍を称賛する様子さえ見受けられる。(「好き心」の積極的な実践を推奨する宮廷内の雰囲気間接的に窺える発言としても受け取れる。

権力が熟成期に到ると、王は、群衆から見られる「主役」から、「演劇の保護者、すなわち至高の観客」見者としての地位」に移行するという^①。藤壺との間に待望の皇子(後の冷泉帝)を得た桐壺帝は、さらに盤石な「地位」を築く。この「至高の観客」を興ざめさせないように、日夜、源典侍を含めた女房たちは行動してきたと考えられる。源典侍が、「常よりもきよげ」な装いをしているのも、桐壺帝の目を愉しませるためであった。

また、源典侍と光源氏の和歌の応酬に注目してみよう。源典侍は、「森こそ夏の、と見ゆめる」という発言を巧みに捉え、

己を指して、「さかり過ぎたる下葉」という表現に転換する。また、これまで関係をもった男たちを、「手なれの駒」とたとえる。自己の老いと好色な性格を諧謔的に詠った余裕ある和歌となっている。それに対して光源氏は、「笹分けば人や咎めむ」と逃げ口上めいた返歌をするのが精一杯。自分から声をかけながらも相手の迫力に圧され、これ以上の関係は及び腰である。「わづらはしさに」と立ち去ろうとしたところ、さらに源典侍の追い打ちをかけられ、「いま聞こえむ」と形式的な返事をするこゝろできなかった。源典侍が主導権を握り、光源氏を圧倒していく様子が見える贈答歌であった。

なお、源典侍の「橋柱」という発言には、「限なく思ひながらの橋柱思ひながらに中や絶えなむ」(拾遺集・恋四、八六四・よみ人知らず)が踏まえられる。いかなる事態にも対応する機転の早さも確認される。

典侍は、ある時期から、「女官長的役割」を担うようになった⁽²⁾。後宮を代表する職掌として、典侍は周囲の羨望を集めてきた。ここでも、桐壺帝自慢の「よしある宮仕人」の代表格として登場しているのである。

三、女としての一面

光源氏と源典侍の関係はすぐさま周囲の関心を集めた。その様子が次の引用文である。

人々も、思ひの外なることかなとあつかふめるを、頭中将聞きつけて、いたらぬ隈なき心にて、まだ思ひよらざりけるよと思ふに、尽きせぬ好み心も見まほしうなりにければ、語らひつきにけり。この君も人よりはいとことなるを、かのつれなき人の御慰めにと思ひつれど、見まほしきは限りありけるをとや。うたての好みや。

(紅葉賀・①・三三九頁)

右引用では頭中将の反応に注目が集まり、「人々も、思ひの外なること」と思いながらも、他の女たちの反応は語られない。典侍は後宮十二司の中心的立場にあった。²³⁾物語上に語られないだけで、周囲の批判を封殺する力が源典侍にはあったのかもしれない。源典侍の紹介部分に「人もやむごとなく心ばせありて、あてにおほえ高く」とあったことも看過できない。しかし物語の関心は、源典侍のそうした人心掌握術よりも、二重傍線で示した所にあつたらしい。

源典侍にとって、頭中将との関係は新たな人脈を作る上でなくてはならないはずであるが、意外にも、「かのつれなき人の御慰め」としか思わない。光源氏の代用にはならないというのである。「うたての好みや」と語り手が揶揄している通り、数多の男との間に浮名を流してきた源典侍からすると意外な反応である。こうした光源氏に対する愛情は連続する次の場面でも語り出される。

夕立して、なごり涼しき宵のまぎれに、温明殿のわたりをたたずみ歩きたまへば、この内侍、琵琶をいとをかしう弾きむたり。御前などにも、男方の御遊びにまじりなどして、ことにまさる人なき上手なれば、もの恨めしうおほえけるをりから、いとあはれに聞こゆ。「瓜作りになりやしなまし」と、声はいとをかしうてうたふぞ、すこし心づきなき。鄂州にありけむ昔の人もかくやをかしかりけむと、耳とまりて聞きたまふ。弾きやみて、いという思ひ乱れたるけはひなり。君、東屋を忍びやかにうたひて寄りたまへるに、「おし開いて来ませ」とうち添へたるも、例に違ひたる心地ぞする。

(紅葉賀・①・三三九〜三四〇頁)

温明殿をそぞろ歩いていた光源氏は偶然にも源典侍が奏でる琵琶の音を耳にする。その巧みな音色に足を止め再び垣間見るようになるが、一度目の垣間見とは違って彼女の老醜が話題にのぼらないのである。

さて、源典侍の「瓜作りになりやしなまし」という口ずさみには催馬楽「山城」が引用されている。(『新編全集』頭注に、

「典侍は、いつそ卑賤な者の妻になって、冷淡な貴公子源氏をあきらめようかと一瞬思ったのだろう」（頭注二〇・三三九～三四〇頁）とあるように、ここでは源典侍の迷いが明らかとなる。相手との年齢差がこのまま恋愛感情を貫いてよいか迷う気持ちを生んだのだろう。さらに連なる文には、「鄂州にありけむ昔の人も」と、白楽天「夜聞歌者」の故事が踏まえられた箇所がある。そうした表現の響きあいは、「源典侍を若者に懸想する烏辭な老女ではなく、「思ひ乱れ」詠嘆する女性」という一面を、読者にイメージさせていく。それは続く光源氏との贈答歌でさらに強められる。

立ち濡るる人しもあらじ東屋にうたてもかかる雨そそきかな

とうち嘆くを、我ひとりしも聞きおふまじけれど、疎ましや、何ごとをかくまでは、とおぼゆ。

人妻はあなわづらはし東屋の真屋のあまりも馴れじとぞ思ふ

とてうち過ぎなまほしけれど、あまりはしたなくやと思ひかへして、人に従へば、すこしはやりかなる戯れ言など言ひかはして、これもめづらしき心地ぞしたまふ。
（紅葉賀・①・三四〇頁）

光源氏は「例に違ひたる心地」を感じた。というのも、夕立の後という情景と、源典侍の口ずさみに合わせて「東屋」の一節を朗詠したのだが、それに対して相手が「おし開いて来ませ」と謡うとは思わなかったからである。さらに追い打ちをかけるように源典侍は和歌を自分からよみかける。

その贈答歌は一見すると、積極的な女の誘いかけに対して男が尻込みをするという展開である。これは前回の贈答歌と同じような構図である。注目したいのは、源典侍の「嘆き」が直接訴えられている点であるが、従来の諸注釈書ではこの感情に注目されなかった。たとえば、『新編全集』は、「神の来臨を歓待する巫女のような趣で源氏を迎え入れる」（頭注四・三四〇頁）と解釈する。しかし、ここで詠まれた和歌を見返してみると、催馬楽「東屋」を下敷きにしつつも、ただ「源

氏を迎え入れる」雰囲気を、相手に伝えたいわけではなかったことが明らかとなる。

源典侍の和歌にある「東屋」は彼女自身を喩えたもので、「そんなわたしを訪問する男など居ない」という嘆きがこめられる。さらに下句でその感情を強める「雨」という表現がある。「雨」は涙を連想させる歌ことばとして常套的に詠み込まれる。この和歌は、「常套表現を用いたもの²⁵⁾」と見ることもできる。「君し来ば手なれの駒に」と積極的に誘いかけた前回の贈歌と違って、己の〈老い〉を悲嘆することに終始している点には注目しておきたい。自分の力では止めることができない〈老い〉と理性では抑えきれない愛情との狭間で揺れる、源典侍の心情が表れる和歌であった。

光源氏はそれに対し、「我ひとりしも聞きおふまじけれど、疎ましや、何ごとをかくまでは」という反応を見せる。光源氏自身彼女の気持ちを聞く責任を感じている。しかし「我ひとり」聞くには重すぎる。ここでも及び腰になっている。光源氏の返歌にもそうした気持ちが如実に表れる。「東屋」を下敷きにしながらも、その内容は、「あなたに馴れ馴れしく近づくまい」と拒絶する気持ちを伝えるものとなっている。このまま無視をしたいとさえ思っている。だが、「あまりはしなくやと思ひかへして」、そこに留まる。「はしたなし」は「追いこまれたようなきまりの悪い感じや、物事が不安であったり、その場にじっくりしていなかったりして、落ち着かない感じ」²⁶⁾の意である。源典侍に自分から言葉をかけた責任を感じていた光源氏は、彼女の思わぬ嘆きに触れ、心の深奥にあった憐憫の情を強める。この夜、光源氏が源典侍と契りを結ぶのは、彼が源典侍の和歌から強い嘆きを感じ取り、その思いに同情したからであった。

ところで、光源氏と源典侍の逢瀬は温明殿で実現する。温明殿は内侍司の女官たちが常駐する空間であり、源典侍にとつて見れば比較的〈私〉の部分を出せる空間であったと考えられる。光源氏と会ったのは、「夕立して、なごり涼しき宵」であった。それはつまり、周囲に人気のない状況だったことになる。光源氏と源典侍の贈答歌が交わされる前段階として、こうした場面設定がなされることは、宮廷内で女房たちがいかに心情を吐露できないかを窺わせる。桐壺帝が選りすぐった「よしある宮仕人」もまた一人の人間である。感情を全く持ち合わせぬ機械ではない。

温明殿で交わされた源典侍と光源氏との贈答歌は、嘘偽りない一人の女としての思いが語られ、それに心を動かされる男の姿が語られているのである。

四、女房としての一面

源典侍と光源氏の逢瀬が終わりを告げると、頭中将を交えた騒動へと物語は展開する。

突然の侵入者に動揺した光源氏は、「あな、わづらはし。出でなむよ。蜘蛛のふるまひはしるかりつらむものを。心憂くすかしたまひけるよ」(三四二頁)と言う。その侵入者を、「なほ忘れがたくすなる修理大夫」(三四一頁)だと誤認したからである。男にどんな危害が加えられるか怖れた光源氏は早々この場から逃げ出そうとする。源典侍もまた動揺していたが、ただ恐怖で震えるばかりではなかった。

内侍は、ねびたれど、いたくよしばみなよびたる人の、さきさきもかやうにて心動かすをりありければ、ならひて、いみじく心あわたしきにも、この君をいかにしきこえぬるにかと、わびしさにふるふふるふ、つと控へたり。

(紅葉賀・①・三四二頁)

この源典侍の対応について、『源氏物語評釈』は、「典侍が必死であればあるほど、いっそう滑稽味はます」(三一四頁)と捉える。しかし「さきさきもかやうにて心動かすをりありければ、ならひて、いみじく心あわたしきにも」とある。これにより冷静に状況判断をしていたことが確認され、自分よりも「この君」への危害が最小限になるように思い巡らせていた様子が見えてくるのである。

中将、いかで我と知られきこえじと思ひて、ものも言はず、ただいみじう怒れる気色にもてなして、太刀を引き抜けば、女、「あが君、あが君」と向かひて手をするに、ほとほと笑ひぬべし。好ましう若やぎもてなしたるうはべこそさてもありけれ、五十七八の人の、うちとけてもの思ひ騒げるけはひ、えならぬ二十の若人たちの御中にて物怖ぢしたるいときなし。

(紅葉賀・①・三四二―三四三頁)

騒動の主導権を握る頭中将がさらなる働きかけを二人に対して行う場面である。源典侍の「あが君、あが君」という台詞が目につくが、特徴的なのは、彼女に動作に対する草子地が加えられる点である。傍線で示した二箇所である。それにより「必死」な彼女の動作を笑う場面となるが、ここで一度考えておきたいのが冷静に侵入者の動向を観察していた源典侍がどうしてそこまで「必死」になったかという点である。その原因は二重傍線を付した頭中将の行為にあるのではないか。

頭中将は、「ただいみじう怒れる気色」を見せながら刀を抜いた。状況からして二人は斬られる危険性を感じていたはずである。『源氏物語』には二人の男が同じ一人の女に思いをかけた末、後に関係をもった男が先の男を妬んで殺してしまう話がある。嫉妬や痴情のもつれによる殺傷は平安時代にもあったことがうかがえる。また、『源氏物語』の中では登場人物が刀を抜く場面がもう一例しかないのだが、その一例は物の怪が夕顔をとり殺す印象的な場面であった(夕顔・一六四頁)。刀が抜かれる理由は異なるが、その行為がなされたことで、人の死が可能性として浮上する。「宮廷は、帝王以外の者がそこで死ぬことはできなかつた」特殊な空間である。源典侍が「必死」に懇願するのも理解されてくる。源典侍の動作には愛する男を守ろうとする自己犠牲の精神とともに、死の穢れから宮廷内を守ろうとする職業意識も働いていたのである。それを読み落としてしまうと、従来の理解のような、老女の滑稽な動作としか見られないことになってしまう。動作の「う

はべ」ではなく、その行為をするに至った経緯を考えなければなるまい。

騒動の翌日、源典侍と光源氏の間で贈答歌が成立する。この贈答では、両者の意識に隔たりがある点に注目したい。

内侍は、あさましくおぼえければ、落ちとまれる御指貫、帯など、つとめてたてまつれり。

「うらみても言ふかひぞなきたちかさね引きてかへりし波のなごりに

底もあらはに」とあり。面なのさまやと、見たまふも憎けれど、わりなしと思へりしもさすがにて、

あらだちし波に心は騒がねと寄せけむ磯をいかがうらみぬ

とのみなむありける。

(紅葉賀・①・三四四頁)

男たちに恥をかかされた源典侍は「あさましく」思うその心のありようを和歌にした。まるで決別の気持ち伝えるかのように、光源氏の置き土産とともにそれを送った。和歌の内容を詳しく見てみると、「うらみても言ふかひぞなき」と、まず失意の情が訴えられる。自らの愛情を「波」のうねりに見立て、かつては深い愛情を寄せたが、今はその「なごり」さえ無くなった。その気持ちは和歌だけでは収まりきらなかつたようで、さらに「底もあらはに」と加える。『源氏物語』以来、「わかれてのちぞかなしきなみだ河ぞこもあらはになりぬとおもへば」(新勅撰和歌集、恋四・九三七、よみ人しらす)が踏まえられるとされる表現であり、これにより、「わかれてのち」、昨夜の出来事を振り返った源典侍が、光源氏から愛情の「底」が見える対応をされたことを反芻し、悲しみを深める様子が見えてくるのである。

一方、光源氏はそうした感情を汲み取らない。昨夜の失態は棚に上げ、「面なのさまやと」彼女への憎しみを心に募らせる。一方で無視もできず、形式的な返歌「のみ」する。「のみなむありける」と係り結びで強調されており、いかに表面的な対応だったかが強調されている。

光源氏の和歌を見てみよう。贈歌の表現をうけて、「波」、「うらみね」、その縁語である「磯」を表現に組み込む。相手の歌ことばに即応しているところから、非凡な歌才が表現上見受けられる。しかし、その内容は相手を拒絶する意識がありありと見える。『新編全集』頭注には、「『あらだちし波』は中将を、その波を『寄せけむ磯』は典侍」（注六・三四四頁）に喩えているとある。本来なら、侵入者である頭中将に「心」を騒がせるはずなのに、ここではそんな彼と関係を持った源典侍を恨んでいる。そして、「下り立ちて乱るる人は、むべをこがましきことも多からむ」（三四五頁）と、早々に源典侍との関係を忘れようとしているのである。

それぞれの和歌表現をすこし辿ってみたが、二人の気持ちが完全に離れていることが確認される贈答歌だった。しかし、それでもなお源典侍は、「紅葉賀」巻最後の登場場面で次のような行動を見せる。その理由を最後に考えておきたい。

さてその後は、ともすれば事のついでに言ひむかふるくさはひなるを、いとど、ものむつかしき人ゆゑと、思し知るべし。女は、なほいと艶に恨みかくるを、わびしと思ひありきたまふ。
(紅葉賀・①・三四六頁)

源典侍は、強い拒絶を見せた光源氏に「なほいと艶に恨みかくる」行為をしていたというのである。まるで自らの心情とは相反するような行いであるが、源典侍が日常を過ごす空間では、「かたち心ある」人々が、毎日、しのぎを削っていた。この巻では産褥期の藤壺が「人笑はれにや」（紅葉賀・三三五頁）と思いかから気持ちを持ち直す様子が語られる。桐壺帝の寵愛を集める藤壺でさえ、宮廷に身を置く以上、人に笑われないように過ごすことが必要だった。換言するならば、他者から自分がどう見られるか常に意識して行動しなければならなかったといえる。

光源氏に冷淡な仕打ちをいくら受けることになっても、すでに彼との関係は周囲に広まっている。自分から彼との距離を置いたとの噂が流れるのは得ではない。そうした損得勘定が働いたのではないか。長年、「よしある宮仕人」として生き

てきた源典侍が、どうすれば保身に繋がるか考えた末に導き出したのが、好色な老女を演じ続けるという選択であった。源典侍は宮廷内の空気を敏感に感じ取り、その都度その都度自分が生き残る最善の手段を取ってきたはずである。女として「心動かすをりをり」があったとしても、そうした感情を押し殺して生きる。それこそが源典侍の処世術であり、そうした生き方は、当時の女房層には共感されたはずである。

五、まとめ

本稿は源典侍の人物像の再検討を試みた。源典侍は、「典侍」として周囲の期待に沿った行動をしなければならなかった現実があった。しかし誰しも仕事と私情との間で葛藤が生じる。そうした感情の揺れを源典侍をめぐる物語は見せる。

『源氏物語』では、「紅葉賀」巻に至るまでに、葵上、空蟬、軒端の萩、夕顔、六条御息所、藤壺、末摘花といった女性が登場してきた。その境遇や素性は多様であったが、事実上、女房として第一線で活躍する女性が話題になることは無かった。ここにこそ源典侍の存在価値はある。

誰にも理解されない心のせめぎあいを持ちつつも、女房として宮廷で生きる道を選ぶ。そうした重くなりやすい話題を、源典侍は、滑稽な振る舞いによって、物語世界内の色調を暗くしないようにした。〈烏澁な老女〉という、うわべを見ていただけでは、到底、道化師の深奥にある哀しみを読み取れないのである。

注

(1) 『新編日本古典文学全集』（論文内では『新編全集』と略記する）頭注に、「物語としては、色どりとしての挿話の趣である」（紅葉賀・①・三四七頁）とある。なお、『源氏物語』の本文引用は、阿部秋生ほか校注・訳『新編日本古典文学全集』、小学館

- 一九九四年～一九九八年に拠り、引用本文末に卷名・分冊数・頁数を示す。なお、本文には私に傍線などを附した箇所がある。
- (2) 石川徹「末摘花と源典侍―鼻赤き姫君と老いらくの恋やまぬ女―」(『国文学 解釈と鑑賞』、一四―八、一九九九年八月)
- (3) 三谷邦明「源典侍物語の構造―織物性あるいは藤壺事件と朧月夜事件―」(『物語文学の方法Ⅱ』、有精堂出版、一九九九年)
- (4) 小林茂美「源典侍物語の伝承構造論」(『源氏物語論序説―王朝の文学と伝承構造Ⅰ―』、桜楓社、一九七八年)
- (5) 鈴木日出男「源典侍と光源氏」(『源氏物語虚構論』、東京大学出版会、二〇〇三年)
- (6) 小嶋菜温子「源典侍と朧月夜―催馬楽を超えて―」(『源氏物語批評』、有精堂出版、一九九五年)
- (7) 久富木原玲「天照大神の巫女たち―六条御息所、そして源典侍―」(『源氏物語 歌と呪性』、若草書房、一九九七年)
- (8) 藤本勝義「源氏物語の女官―紫式部日記の接点―」(『源氏物語の想像力―史実と虚構―』、笠間書院、一九九四年)
- (9) 倉田実「源典侍物語の意味―「典侍」の職掌から―」(鈴木一雄監修・伊藤博編『国文学解釈と鑑賞別冊源氏物語の鑑賞と基礎知識No.22 紅葉賀・花宴』、至文堂、二〇〇二年)
- (10) 津島昭宏「烏滸物」(林田孝和ほか編『源氏物語事典』、大和書房、二〇〇二年)
- (11) 佐藤尊礼「源氏物語『源典侍』考」(『東洋大学大学院紀要(文学研究科)』、三七、二〇〇一年二月)は、他に『うつほ物語』などを取り上げるが、特に源典侍の独自性まで言及されていない。
- (12) 前掲注(3) 三谷論。
- (13) 新間一美、外村南都子校注・訳『梁塵秘抄』(新編日本古典文学全集四二)、小学館、二〇〇〇年
- (14) 『二中歴』(近藤瓶城編『新加纂録類』(改定史籍集覧、臨川書店、一九八四年所収))
- (15) 松尾聰・永井和子校注・訳『枕草子』(新編日本古典文学全集一八)、小学館、一九九七年
- (16) 柏木由夫「桐壺帝の後宮」(注(9) 書所収)
- (17) 岡部明日香「源典侍について―桐壺院宮廷の位置づけと『をこ話』の意義―」(室伏信助監修・上原作和編『人物で読む『源氏物語』―朧月夜・源典侍』、勉誠出版、二〇〇五年)
- (18) 河添房江「花宴巻の朧月夜と光源氏―桜襲と唐の綺―」(『源氏物語時空論』、東京大学出版会、二〇〇五年)。なお、原岡文子「遊女・巫女・夕顔」(『源氏物語の人物と表現 その両義的展開』、翰林書房、二〇〇三年)は、扇には夕顔の遊女性を象る機能があ

るとする。また、倉田実「扇の役割と絵―源典侍と朧月夜の君―」(注(9)書所収、本橋裕美「平安の櫛と扇をめぐる―物語における機能と変遷を中心に―」(河添房江編『王朝文学と服飾・容飾 平安文学と隣接諸学9』、竹林舎、二〇一〇年)、坪井暢子「扇に書く―『源氏物語』の消息文に関して―」(平野由紀子編『平安文学新論―国際化時代の視点から―』、風間書房、二〇一〇年)などは、所有者を象徴する機能を扇に認めている。

(19) 特に注記の無い和歌引用はすべて「新編国歌大観CD-ROM版 ver.1」に拠る。

(20) 玉上琢彌「源氏物語評釈 第二巻」、角川書店、一九六五年。

(21) 大澤真幸「王の身体の内部分化」(身体の比較社会学Ⅱ)、勁草書房、一九九二年)。また、王の役割として、大澤は、(第三者の審級)という造語で、その存在感を示している。(第三者の審級)については、「抑圧身体」(『身体の比較社会学Ⅰ』、勁草書房、一九九〇年)に次のように定義される。

第三者の審級とは、ある領域の(集合をなす)身体達の妥当な(可能的・現実的)志向作用のすべてを代表しているものとして現れる超越的な志向作用の帰属場所となる、多少なりとも抽象的な身体が存在場所、のことである。(六一頁)

(22) 後藤祥子「内侍」(秋山虔編『王朝語辞典』、東京大学出版会、二〇〇〇年)

(23) 『後宮職員令』では「宮人の職員」の最初に内侍司が置かれる。参考として次に引用する。

尚侍二人。掌らむこと、常侍、奏請、宣伝に供奉せむこと、女孺を檢校せむこと。兼ねて内外の命婦の朝參、及び禁内の礼式知らむ事。典侍四人。掌らむこと尚侍に同じ。唯し奏請、宣伝することを得ず。若し尚侍無くは、奏請、宣伝すること得む。

(井上光貞ほか校注『律令』(日本思想大系三)、岩波書店、一九七六年)

右の規定では、「若し尚侍無くは」とあるが、後藤祥子「尚侍攷―朧月夜と玉鬘をめぐる―」(『源氏物語の史的空間』、東京大学出版会、一九八六年)や加納重文「平安中期の女房・女官」(増田繁夫ほか編『源氏物語と紫式部』(源氏物語研究集成 第一五巻)、風間書房、二〇〇一年)に拠れば、時代とともに尚侍が后妃への階梯という位置づけに代わっていったため、実務全般は典侍が担当したという。須田春子「平安時代後宮及び女司の研究」、千代田書房、一九八二年によると、典侍を務めた家系は、和氣・葛井・永原・小野・橘・清原・当麻・菅野・大和・菅原・春澄・藤原・甘南備・上毛野・吉岑・滋野・源・大江・高階の十

九氏であつたらしく、尚侍のように、「必ずしも藤原氏に限らず、その家系は多様」であつたという。

(24) 西本香子「琵琶を弾く女君」(小山清文ほか編『源氏物語の新研究—宇治十帖を考える』、新典社、二〇〇九年)

(25) 外山敦子「源典侍—重畳する両面性が織りなす物語—」(『源氏物語の老女房』、新典社、二〇〇五年) は、「催馬楽『東屋』を下敷きにしつつその内容を否定するという女歌の常套表現を用いたものだった」と捉える。

(26) 大野晋編『古典基礎語辞典』、角川学芸出版、二〇一一年

(27) 注(20)に同じ。

(28) 右近の姉の体験として次のような話が浮舟に対してなされる。二人に思いを寄せていた「女は、今の方にいますこし心寄せまさりてぞはべりける。それにねたみて、つひに今のをは殺してぞかし。」(浮舟・一七八頁)。薫と匂宮と浮舟の関係を暗示する部分であるが、三つ巴の恋愛模様末路には死があることを示す例である。

(29) 益田勝実「日知りの裔の物語—『源氏物語』発端の構造—」(『火山列島の思想』(ちくま学芸文庫)、筑摩書房、一九九三年)

(30) 中野幸一編『源氏積』(源氏物語古註釈叢刊第一巻)、武蔵野書院、二〇〇九年

(博士後期課程満期退学)